

「 レポート 6月21日 川村雄次先生 」

6月22日

介護職 佐藤 孝子

職業としてケアに携わっていますが、日ごろから認知症の人に接するときはいつも介護者として一方的な目線で行って来ました。家族の都合で病院や施設で過ごし、病状がどんどん悪くなっていくケースばかりを見ていました。家族の介護負担がどれほど大きいかはよく分かっていますが、周辺症状がかなり悪くなり、薬も多量服用している認知症の方を病人としてみるのではなく、その人の生活全体を知り、本人の思いをほとんど知らないままケアをしていました。

共感的理解について介護の基本であることを教わりましたが、認知症の利用者と接するときは、どうしてもコミュニケーションがうまく出来ず、本人の気持ちを理解できずにケアをしています。

尊厳ある人間としてではなく、認知症という病人として見ているので、日常生活や社会生活に支障をきたすようになったときに、共感的に理解をしていく姿勢が介護者にあり、社会的に必要な支援が得られれば、本人が希望する生活が送れることまで考えていませんでした。

認知症の人は自分の衰えに対しての不安な気持ちや失敗を人に見せまいとしたり、周囲とコミュニケーションがうまく取れないことへのいらだち等が問題行動となっていますが、実は介護者側の不安や動揺がそうさせているのではないかと思います。認知症でなくても齢を取り、自分の衰えていく様に、不安な思いが強くなっているこの頃です。

NHKの番組で認知症問題が取り上げられ、認知症の人々が自身の言葉で語り、生き生きと楽しく過ごしている様子を見たときは、本当にショックでした。尊厳ある人間として、プライドを持って自分の生きたいように、過ごされていることが良く分かり感激いたしました。

2009年クローズアップ現代で取り上げられた「認知症“本人がきめるケア”」はすばらしい放送でした。まったく同感です。社会的な支えがあればその人らしく生きることが出来ることを確信いたしました。

認知症になっても人格は残り、プライドがあることを意識してケアをする心構えをこれからもしっかりと持ちたいと思います。